平成 24 年度
学校関係者評価委員会からの提言

世田谷区立砧南小学校
学校関係者評価委員会委員長　田中　三津男

１．提言：学校（教職員）に対して

生活指導と挨拶について

（1）生活指導

・先生は子どもたちから“尊敬”される対象になる。
・子どもたちと「友達関係」ではなく、良い意味での上下関係を構築するべきである。
・子どもたちに「迎合」することなく、毅然とした指導をする。
・「してはいけないこと」と「して欲しいこと」を明確に指導をする。
・「ほめること」と「しかること」は、時を得てしっかりと行う。
・先生が自信をもって子どもを指導する。

上記のことがクラスの中で自然となされた時に、子どもたちは先生からの言葉を心で捉えることが出来ると考える。生活指導は特別なことではなく、日々の節度ある接触から自然となされるのである。

生活指導の根本は、先生と子どもたちとの「信頼関係」である。信頼関係は、築くのに時間がかかる反面、あっという間に崩れ去る怖さを併せもつ。年度始めの保護者会では、その点の協力を率直に伝えて協力を促してはいかがだろうか。

（2）挨拶について

「率先垂範」を継続して行う。

誰かに何かをして欲しいと考えた時、先ず自分から行う。上位の者が行う事は、下位の者に対して見本となることを実証して欲しい。

学校の中で、「いつ」「どのようなとき」「誰」に挨拶をするのかのガイドラインを先生と子どもたちとで話し合い、モデルケースを決めたらいかがだろうか。モデルケースが出来ることで、子どもたちは自信をもって挨拶が出来るようになるのではないか。

子どもたちの間で「不審者ごっこ」という遊びがあるのをご存知だろうか。不審者に連れて行かれないように逃げる、言わば鬼ごっこの変形版。それほど子どもたちの中には、知らない人を警戒する習慣が根付いてしまっている。知らない人に対する挨拶を交わす、その状況判断は子どもたちだけではむずかしいものがあると言える。挨拶運動や昇降口など、限られた条件の中でしか子どもたちが挨拶できていないとしたら、そのことが学校外での挨拶にも反映していると考える。

挨拶は人と人を結びつける特効薬だが、なかなか簡単に出来ることではない。日々の挨拶を通して、挨拶のもつ可能性を模索して欲しい。

２．提言：保護者に対して

問題を教訓にし、成長を応援できる環境づくり

「共に学び、共に育つ子供」
砧南小学校の教育目標です。この言葉は子どもだけに止まらず、先生・保護者にも当てはまるのではないでしょうか。
　かれこれ１０数年前の保護者会でのことですが、そのことをとても考えさせられる場面がありました。

◆◆◆◆◆

　子どもたち数人の中で、金銭にまつわるトラブルが発生。保護者会で話し合いが行われました。被害者と加害者、子ども同士の力関係、新任だった担任の先生への要望など、緊張したムードになりかけた時、あるお母さんが突然切り出しました。

「私は最近、子どもの周りで起こる問題はウエルカムと思えるようになりました。
　上の子を見ていると、大きくなるにつれて、悪いことって親にも先生にもだんだん見えなくなるんです。思春期になると仕方ないことですが、何か悩みがありそうなのに聞いても話してくれないし、親の言うことなんかまともに聞いてくれません。でも何がいいか悪いかはわかっていても、問題が起こった時どうしたらいいか正解はないし、大きくなってもその都度悩んでいると思うんです。親の心配は、子どもがいくつになってもつきないと今つくづく感じています。
　だから小学生のうちに、色々な問題がいっぱい起こって欲しいと思うんです。あの時こうだったという経験はひとつのヒントになるし、今なら親も先生もいっしょに考えてあげられて、子どもも聞く耳をもってくれますから。また親って、問題が起こってみないと普段は考えてもみないですから、子どもだけでなくいい勉強をさせてもらってるように思えるんです。先生にはご苦労をおかけしますが、小学生の時期って親子共に成長できて本当にありがたいです。」

　その場の雰囲気が一変しました。なるべく問題を避けて通りたい、子どもの周りが何事もなく平穏であって欲しい。みんな当たり前のようにそう思っていました。でも困ったことが起こった時、失敗した時、悪いことをしてしまった時、どう対処するか考える力を身につけることが一番大事なのは間違いありません。問題が起こった時こそ、子どもたち同士で考えたり話し合ったり、学びのいいチャンスと捉えることができるのではないか。学校は勉強だけでなく、そんな貴重な機会を与えてくれる場なんだという、ごく当たり前のことを、クラス全体で改めて確認し合える瞬間となりました。

　砧南小のように児童数が１０００人に迫るマンモス校では、日々様々な問題が生じて来るのは、ある意味仕方のないことかもしれません。ただ、ひたすらその対応に追われてしまい、対応事態が学校の大きな仕事となっているのが現状で、本来なすべき教育の本質（子どもにやる気を起こさせる教育）に割く時間が少なくなっています。前述のように、発生した事柄に対応する時にこそ、子どもたちが次のステップに進めるような環境作りをしたいもの。失敗や挫折から生まれる教訓が、子どもたちの学びとして生かせるよう、温かく思いやりのある雰囲気をつくっていきたいものです。
　イソップ物語に「北風と太陽」の話があるように、人は温かい対応に心を開くことは議論の余地はありません。相手にしっかり耳を傾けて欲しい時、責め立てるより自ら気づいて行動に結びつけていけるような導き方ができたらと思います。
　ただ、子どもたちと日々接し指導をしていく先生たちにとっては、安心して学級運営が出来る環境作りが喫緊の課題です。先生一人一人が努力し、自己研鑽しながら行っていく学級運営に、何かしら支障が生じ滞る事態になった時にも、先生が萎縮することなく、いつも前向きな対応が出来るように、温かく応援をしていきませんか。端で見ている子どもたちにとって、応援し応援される助け合う姿こそが、頑張れる人を育てるための生きた教育であると思えるからです。

　子どもたちが夢や可能性を信じ前に進む生き方をするために、砧南小学校関係者、一人一人の力が必要です。学びの土壌とも言える失敗を恐れずに、のびのびとした雰囲気をつくっていきたいと考えておりますので、何卒、宜しくお願い致します。